



# 木漏れ日の戦争



kurunau

ああ、面倒だな。

その時、私はそう思っていた。大尉になり、ある場所で中将と食事に誘われていた。名誉あることなのだろうか？いくら中将とはいえども、ただの人間だ。それに変わりはない。これまでも何度か、位の高い人には会ってきたがだれもが自分の位や手柄のことばかり気にしていて、周りを見失っている。今回もその類の人間だろう。階級や手柄ばかり気にして前線で戦う兵士のことなんぞなんとも思わないだろう。戦争がなんだ、戦いがなんだ、俺はこの戦争自体が賛成じゃないのだ。全員がそんな軍人ではないだろうとは思いますが、会えた人物がそんな印象しか受けなかった。ほとんどが軍事大学出で元から位が高く、前線にも出ていないで基地司令官になった奴すらいる。だから今回も少し面倒だと考えていた。

「君はこの戦争についてどう思っている？」これまで会ってきた人間が言ってきたことだ。その問題に答えなど存在しえるのだろうか？「この戦争は名誉あることであり、祖国の栄光のためでもある」決まってそんな言葉を並べる。つまり答えはなんだ？この戦争に勝って祖国が活気ある国に変貌し、世界を平和にできるということなのだろうか？結局大事なのが自分の名誉なのは決して口に出すことはないだろう。私は目的の場所へと向かうため、車に乗り込んだ。平原が流れる風景を眺めながら先ほどの難題に立ち向かう、「あなたは戦争に対して反対か賛成か？」と問われて私は黙り込んでしまうだろう、答えが見つからない、もし「反対」と答えるならば「目の前で工作員に連れ去られる友人を見て私は助けてはならない」ということになるし、「反対」と答えるならば「戦争は犯罪でない極限状態で死んでも文句は言えない」ということになる。だから答えはない。

目的の場所に辿り着く、車を降りると車はすぐさま去っていった。場所はここで間違いないのだが中将の姿が見えない。本来なら豪華なホテルや荘厳な雰囲気を持つレストランなど目を見張るところばかりに居たが今回はその雰囲気はまったくなかった。見渡す限りの平原、波のような形の地平線が並んでいる。そんな風景に私は魅入っていたところ、人の声がある。私は人の声が聞こえる方向へと視線を移す、「やあ、君が例の大尉だね？」少し痩せた体格の持ち主ではあったが幾戦もの戦場を駆け抜けた感じのする人物だと思えた。私は中将に対して敬礼をすると中将は少し困ったような表情で顎鬚を触りながらいった。「そんな堅苦しい挨拶止めにしよう」近くの木の下に小さなテーブルと椅子が用意されており、私と中将はその椅子に座った。テーブルはそこらへんに落ちていた板を付け合せたような質素な物で椅子も同様に簡単に作られた物だった。正直、私はこの人物が中将だとはまだ信じられなかった。

中将は後ろに置いてあった小さな簡易コンロにフライパンを置き、分厚く切ったハムを乗せ焼き始める。「君は、大尉になってどう思った？」ハムを炒めながら中将は話しかけた。「大変、光栄だと思っております」私がそう答えると中将はまた困ったように顎鬚を触り、言った「偽りの言葉なんぞ私には不要だ、いくら皮を被ろうとボロが出ればばれるものだ」少し不意を突かれてしまった。これまで会った人物とは違うタイプらしい、完全に心を読んでいた感じだった。「そう深く考え込む問題でもないだろう？」中将は焼け始めるハムに胡椒と塩を軽く振る。「いえ

…はい、確かに貴方のおっしゃる通り、それほど嬉しい訳ではありません」私が本音を吐くと中将は少し笑った。「それでいい、本音をぶつけ合うためには自分から殻を脱ぐ必要があるからな」と言った。焼けたハムを鉄のプレートの上に載せ、リングソースとバジルを掛けると私の目の前に置いた。

「どうだ？最高級のハムでもなく、一流の職人でもない奴が作った料理は？」と中将は尋ねた、見た目はまるで前線で食べる食事のように思えたが匂いが空腹に追い討ちを掛け、私はフォークとナイフでハムを刻み、口へと運んだ。驚くほど美味しく、これまで食べた高級料理より遥かに美味しいと思った。「大変、美味しいです」中将その言葉を聞くと少し笑いハムを口に運んだ。「このハムは、本当は前線部隊に送られるはずだったのだが補給部隊の手違いでな、手に入れたのだ」中将はビールの瓶とグラスを取り出し、注ぐ「大尉、私のことを疑っているだろう？」また不意を突かれる。中将となる人物がこんな偶然手に入ったハムを自分で料理し、こんな場所でビールを飲んでいる。位の高い人物だとは思えなかった。「これを見れば少しは納得してくれるかな？」そう言って、中将はポケットからバッジを取り出した、それは中将のバッジだった。これでこの人は中将だということが確定された。

「君はこの戦争についてどう思う？」中将は地平線を見ながらいった。「正直な話し、私はあまり良いとは思っていません、後方では上層部が蜜を啜り、前線では兵士が虫のように死んでいく」その言葉に中将は黙って視線を合わした。「限りなく不正解に近い正解だ、だが戦争はビジネスの1つだと思ってくれても問題はない、ただ自分が勝つためだけの戦争を仕組めばいいだけの話なのだ」中将は空になったグラスにビールを注ぐ、気泡を立て泡がグラスの淵を埋める。中将はビールを飲み込むより先に腰に提げた銃をテーブルの上に置く、S A Aと呼ばれるリボルバーの銃で傷だらけではあったが年期の入った銃だということは理解できた。「君はなにを持っているのだ？」私は腰からコルトガバメントを取り出しテーブルの上に置く、巨大な口径に銀色の銃身が光を跳ね返した。「君はなぜ、人が戦争で死ぬと思う？」「銃があるからではないでしょうか？銃は人を殺すためだけにある」その答えを聞くと中将は笑った。そして辺りが雲で太陽を覆った時、凄まじい程の殺気が漂う。その殺気は紛れも無い中将が放っていることに明確だった。だが中将のS A Aはまだテーブルの上だった。私はその意味を理解するとそれを待った。太陽を覆っていた雲が無くなる。銀色のコルトガバメントが太陽の光を反射した時には中将のS A Aの銃口はすでに私の額に向かっていて、私は銃を握ることさえできなかった。

「一回は死んでいたな」中将は苦笑いを浮かべ、S A Aを納め、泡の切れたビールを飲み込む、中将は冷や汗だらけの私のグラスにビールを注ぎ込んだ。気泡の立つビールを飲み込む、少し落ち着きを取り戻す。「君は戦争で人が死ぬ理由は分かるかな？」中将は飲み干したビールの瓶をテーブルの下に置き、私に聞いた。私はその時はすでに冷や汗も収まり、落ち着きを取り戻しており、冷静に口を開いた。「銃があるからではないでしょうか？銃は人を殺すために作られているのがほとんどです」そう言うと中将は空を見上げながら言った。「若い大尉、答えを言いたい所だが今日はここまでにしよう」中将が荷物をまとめ始める。空は少し淀んでおり、風が冷たい。雨が降ることを中将は知っていたのだろう。早々と荷物をまとめ、手を挙げた。それと同時に茂みに隠れていた軍用車が現れ、中将は乗り込んだ。私が車に乗り込むと雨が降り出す、ガ

ラスを打ち付け、辺りが暗くなる。「次、会うならばさっきの答えを教えてやろう」中将は流れる風景を眺めながら言った。そして「お互い生きていればの話だがね」と言った。

中将と別れ、出会った時、私は中佐になっていた。ほとんどの者が私に会えば敬礼する。そして長年続いたこの戦争もそろそろ終止符が打たれようとしている時、ある一通の手紙が届いた。

「あの場所で待つ」と書かれた手紙は名前も、宛先すら書かれておらず、「あの場所」の明確な地図も無かったがそれはだれが書いて、どこの場所なのか私には分かった。私はすぐさま「あの場所」へと向かった。あの人に会えると思えるのが嬉しかったし、なによりも「あの答え」を知りたかった。私は車を走らせ、あの人への場所へと向かった。

空は限りなく蒼く、雲一つない綺麗な空だった。四季が美しい東の国での言葉で「ニホンバレ」というらしい、きっとこの空のようなこと示すのだろう。ようやく目的の場所へと着く、青々とした草原が目優しい、私が中将の姿を探すと中将はあの木の下に居た。「来ていたのかね？ すまないな、少し手伝ってくれないか？」中将は壊れたテーブルを直していた。雨風でボロボロになったテーブルの板を剥がし、新しい板を貼り付け、釘を打った。私も釘を打ち、テーブルを直すと椅子に座った。すると視線は思いのほか沈み、地面に倒れる。どうやら壊れていたのはテーブルだけではなかったらしい。その姿を見て中将は少し笑い、椅子に座った。同じように椅子は崩れ、倒れる。その姿を見て、中将は大声で笑った。私も笑った。大声で。

私と中将は椅子を直し、ひとまず、座った。2つグラスを置き、ビールを注ぐ。「大尉、まだ終わった訳ではない」ビールを飲み干した時、中将はそう言った。私は戦争の事だと思い、すこし気を引き締める。「これで最後だ、踏ん張れ」そう言って中将は白色のペンキが入った缶をテーブルの上に置いた。どうやら修理はまだ済んだ訳ではないらしい。私と中将は白色のペンキをテーブルと椅子に塗り始める。そして自分達の座る椅子が無いことに気付き、再び笑う。草の上に座り、中将は即席でサンドイッチを作り始める。トマトとレタス、少し分厚いベーコン、チーズを乗せて、マスタードを掛け、パンを挟んだ。サンドイッチを頬張る。新鮮な野菜ではないものの、マスタードがアクセントになって、美味しかった。中将はブラックペッパーを振り掛け、食べていた。私はこの日のために朝食を抜いてきていた。空腹にサンドイッチは最高に美味しかった。

蒼い空に一つの雲が浮き出していた。それが太陽を隠した時、中将は私と視線を合わせた。S A Aは草むらの上に置かれ、私のコルトガバメントも草むらの上に置いた。銀色の輝きは、今はなく、細かい傷だらけで光は鈍く反射していた。あれからコルトガバメントにはどれほど命を救われただろうか？そして今回も私を救ってくれるだろうか？あの時は変わらない殺気が私を襲う、だが私は冷静に視線を合わせたまま、私は表情を崩さず、その時を待った。中将は少し笑みを浮かべる。太陽を隠していた雲が無くなると同時に私はコルトガバメントを掴み、銃口を向けた。が、コルトガバメントの銃口はまだ地面を向いており、S A Aの銃口は私の額に狙いを付けられていた。「これで二回目だな、大尉…いや今は中佐かな？」中将はそう言ってS A Aを納めた。少し悔しい気持ちも出たが私はコルトガバメントを納めた。救ってはくれなかったが、がんばってはくれたそれだけ十分だ。

「さて、君は随分と仕事熱心だね」中将はそういった。理由は昇進すれば中将に近づけると考えたのと、それにより「あの答え」が分かると思っていたからだ。だが昇進の時や、式典で中将の姿は見えず、欠席していた。「答えは見つかったかい？」その問いに私は首を横に振った。現在では「最初の答え」は間違いなのだと気付いたのは少佐になってすぐの頃だった。ある一人の上官が部下の犠牲を笑ってみていた。上官はその部下の犠牲によって昇進した。「銃」とはあくまでも殺すための手段であり、道具である。使わなければただの鉄の塊だ。「人が戦争で死ぬのは『殺気』や『憎しみ』などではなく、単純に『欲望』によって死ぬではないでしょうか？」私はそう答える。中将は少し笑い、言った。「限りなく正解に近い不正解だ」と、「戦争で人が死ぬのはそこに戦争があるからなのだよ、中佐」中将はそう言った。確かにそれは言えることだろう。だが中将は少し悲しい表情を浮かべ、地平線を眺めた。「正直、私にもその答えは分からない、そもそも答えが存在するかも知らないのだよ、中佐の言う答えが正解なのかもしれない、もしかしたら全てが『正解』であり、全てが『間違い』なのかもしれないな」そう語った。正解を求めるのは間違いなのだろうか？間違いを求めるのが正解なのだろうか？私には分からない、きっとこれからもその疑問は疑問のままだろう。「そうだな、最後に一つ、問題をやろう、中佐、君は戦争が起きる理由は分かるか？」中将は私にもうひとつの疑問をぶつけた。私は答えることはできなかった。いや答えはあったが、それは「正解」でもあり「間違い」でもあったから答えることは出来なかった。「その答えはまた今度聞くことにしよう」中将はそう言って、立ち上がった。「また、会おう中佐、お互い生きていればの話だがね」そう言って中将は去っていった。

長年続いた戦争はようやく幕を閉じた。核兵器による敵国の首都崩落という形で。私は最後まで核兵器の使用に反論し続けた。無駄な命まで奪う必要はないのだと、私は言った。だが上層部は核兵器によって救われる命があるのだよと返した。その言葉に反論することは出来なかった。これ以上、味方の兵士を失うべきではないと思うなら戦争を終わらすことは最善の策だろう。私は戦争が終わる頃には少将になっていた。傷だらけのコルトガバメントを腰に吊るし、私はあの疑問へと挑戦し続けていた。年月が経ち、一通の手紙が届いた。「あの場所で待つ」と書かれた手紙を見て、私はすぐさまその場所へと向かった。

「来たか、少将になったそうだね、おめでとう」この時、中将はすでに中将ではなかった。すでに除隊しており、いまではごく普通の老人であった。だが腰にはS A Aを吊るしており、白く塗られた椅子に腰掛け、テーブルの横に杖が掛けられていた。「あの答えは見つかったかね？」そう言った。私は黙って首を縦に振った。「平和であるから」私は「正解」なのか「間違い」なのかは分からない。だが私の出した答えはそれだった。元中将は腰からS A Aを抜いた。銃身を掴み、私に差し出す。「私にはすでに相棒がいるので結構ですよ」そう言ってコルトガバメントを見えた。元中将は不敵に笑い、テーブルの上に置いた。私も椅子に腰を据え、コルトガバメントをテーブルの上に置いた。そしてその時を待った。雲が切れ、コルトガバメントを握り、銃口を向けた。S A Aとコルトガバメントの銃口が重なり、今度ばかりは守ってくれた。「惜しいな、3連勝かと思ったのだが」そう言った元中将の表情に悔しさはなく、黙って、手を挙げた。「

少将、君との会話は本当に面白かったよ…そのテーブルと椅子は私からのプレゼントだ。また会おう、どこかでな」そう言った表情は本当に幸せそうだった。

どうやら、戦争が終わってから暇な時間が多く、私は流れる時間をただ過ごしていた。そんな時、一人の大尉が居た。まだまだ若かったが、他の者とは少し違う雰囲気を感じた人物だった。そしてなによりも私を惹きつけたのはその瞳はあの中将と似ていた。そんな時、私はある物を偶然発見する。たまたま補給隊員の手違いで手に入ったハムを手にとると、私は「あの場所」へと向かった。その大尉に招待状を書いて。

私はあの「疑問」についての正解は知らない。だが言えることはある。

死んでいった兵士たちは民間人が巻き込まれることは決して望んではいないだろう。

死んでいった兵士たちは子供が戦う光景を望んではいないだろう。

死んでいった兵士たちは悲しみの涙で自分洗い流してくれることを望んでいるだろう。